

第 63 回(2012. 1.18 配信)

雲竹齋先生の歴史文化講座－「中東・アラブ社会 (11)」

集団礼拝(モスク)

イスラム教徒に義務付けられている礼拝は、ごくわずかの宗派を除いては 1 日に 5 回することに決まっている。この礼拝は自宅で礼拝してもいいし、出先で時間が来たら礼拝して差し支えない。ただ、金曜日の集団礼拝はモスクで行われる。『コーラン』の第 62 章には、「集団礼拝の呼びかけがあったら商売を離れろ」とも書いてある。もちろん、それ以外の日でもモスクに行って礼拝するのは自由である。金曜日のモスクに行って正午の礼拝を集団で行うのは、キリスト教徒が日曜日に教会に出かけて行ってお祈りするのと同じようなことだが、ユダヤ教徒の土曜日、キリスト教徒の日曜日が聖なる安息日だから、それと同じだと言うのは正確ではない。あくまでも礼拝の日であって休息の日ではないのだが、公官庁や商店が休日になることが多い。中東に住む日本人は、金曜日はイスラム教徒、土曜日はユダヤ教徒、日曜日はキリスト教徒と日本人が仕事をしないから毎週 3 連休になる。とはいえ、そんなことをしていたら仕事にならないから苦労している。

金曜日は、前日もしくは当日の早朝、風呂に入って身を清め、当日はモスクの水場で手足を洗い、口を漱いでから、集団で祈る。モスクの内部には、メッカの方角の壁に「ミフラーブ」と呼ばれる窪みがあって、民衆はイマームに従い、このミフラーブのある壁に向かって整然と祈る。聖地メッカの方角を「キブラ」と言うが、そのキブラに向かって人々は祈るから、いわばミフラーブは目印のようなもので、モスクのない砂漠のようなところでは、棒や足の先で[のような印を付けてミフラーブの代わりにする。また、ホテルなどでは、部屋の壁にメッカの方向を示す矢印が張ってあり、客が礼拝するための便宜をはかっている。

モスクは天井がドーム型をした建物で、内部は絨毯やゴザなどが敷かれているだけで祭壇とか椅子などは置いてなく、また絵画なども飾ってない殺風景な大部屋だが、ただミンバルという説教台があって、そこで導師である「イマーム」と呼ばれる長老が説教を垂れる。

モスクは金曜日の集団礼拝だけにあるのではない。有名なモスクには聖人の墓もあるので遠くから巡礼に訪れる人も多い。ふだんの日でも人々が祈りに来ているし、いつも人々の訪問が絶えることがない。子供が大声を上げて堂内を走り回っている光景や、大人たちが昼寝している場面に遭遇することがある。人々は用があってもなくてもモスクに行く。モスクは人々の心をいやしてくれる場所でもあるのだ。

《閑話》 モスクは豪華な建物ではない

モスクはイスラム教徒が礼拝する礼拝堂である、ということは友人たちも知っている。一般にモスクという名称で知られているから、アラビア語だと思っている友人も多いが、モスクは英語の訛ったもので、アラビア語では「マスジド(ひざまづく場所の意)」と言う。これがスペインにイスラム教が入り「モスキータ」になり英語でモスクとなった。これがまた中東に入ってきて「モスク」で通用するようになったのだと言えば不思議そうな顔をするのがおもしろい。

また、写真で見るモスクは「金色のドームがある豪華なお城のようなものだ」と言う友人もいる。しかし、豪華だというのは、一般的に日本人が雑誌に掲載されている写真などで知っているモスクが、イスラム教国の中でも非常に有名なモスクで、帝国時代に王様の命令によって建築されたものが多く、また歴史的にも古い建物だからで、したがって建築資材は惜しまなかっただろうし、また民衆の奉仕も多くなされたであろうから、ドーム状の屋根は黄金色に輝いていたり、ラ

ピスラズリやそれを模したアラビアンブルーと称されている青い色をしていたり、また付属する塔(ミナレット)が何本もあったりする。しかし、一般的には決して豪華な建物ではない。モスクはどんな小さな村でも建てられるが、村人たちの寄付と奉仕によって造られるから、ほとんどはこじんまりとした質素な建物である。

モスクのなかには、天井の装飾や壁のタイルにも、アラベスクと呼ばれるアラビア装飾が描かれているし、いたるところにアラビア語の装飾文字で「アッラーは偉大なり」とか、コーランの一節などが書かれたタイルが張られていて、そういった点では、非常にきれいで豪華なモスクもある。サウジアラビアとかクウェートなど産油国のお金持ちが寄付して建設したモスクの中には、非常に立派なものもあることは確かだが、ほとんどはミナレットも一本で、屋根も決してきらきら輝いてはいない、などと言うと、友人たちは夢を壊された等な気分させられるのだろうか、おもしろくなさそうな顔をする。

ところで、モスクの一番後ろが女性の礼拝する場所と決まっている。もっとも、女性は家で礼拝する者が多く、モスクで集団礼拝をする者は少ないのだが、これは男尊女卑の思想からではなく、女性の祈っている後ろ姿を見て卑猥な連想をする男性がいるからだ。お祈りは額を地面に付けて祈るからお尻が持ち上がる。中東に駐在していた頃「ケツをあげている姿はたまんねえからなあ」と運転手のムレハメッド氏は、黄色い歯をむき出して言った。「後ろに立って見ると、特別な理由もなく大きなお尻を蹴飛ばしたくなるから不思議だ」とも、この男は言った。彼はアッラーの天罰が下って、晩年には半身不随になって口も利けなくなった。雲竹斎も、重労働になると決まって礼拝をして仕事をさぼるやつがいたから、思わず高く上げた尻を蹴っ飛ばしてやりたい気持ちをぐっところえた時が何度もあった。だから、もしかすると、近々半身不随になるのではないか、と心配だ。友人たちは、こういった話の時だけは顔を乗り出してくるから嫌になる。

《閑話》 モスクの塔には登ってはいけない

モスクには「ミナレット」と呼ばれる塔が付随しており、一般的には一つだが、大きなモスクでは左右にそれぞれ一本ずつ、あるいはモスクを囲むように四本も建っているものもある。時間が来ると、この塔の上から「祈りの呼びかけ」をする。これをアザーンと言う。日本のお寺の鐘楼や教会の鐘を鳴らす塔と同じだと思えばいい。「モスクの塔に登ってみたか」と聞かれることが多い。「特別なモスクを除けば、異教徒がモスクに入ることさえ許されないから、ましてや塔にまでは登れない」と言う、友人たちは不思議そうな顔をする。ヨーロッパへの観光旅行では、教会の鐘楼に上って景色を見せるツアーが多いから、当然、観光客がモスクの塔に登ることができると思っているらしい。

ミナレットは、アラビア語のマナーラ(灯台)から訛った英語だが、本来は烽火台や物見台だったと思われる。また、砂漠をやってくる隊商のための灯台だったという説もある。電気もなく、ランプの明かりに頼っていた時代では、村や町が現在ほど明るくなかっただろうから、ミナレットの天辺にランプを持って昇ると、非常に目立ったことだろう。幾日も幾日も過酷な自然と闘い、精根疲れ果てながらも、遠くにモスクの明かりがわずかに見え、かすかにアザーンの声が聞こえてきたとき、隊商の人々はきっと大地に跪いて神に感謝したに違いない。そして、その明かりを目指して最後の力を振り絞ったことだろう。まさに、砂漠の灯台と呼ぶにふさわしかったと思われる。

1日に5回のお祈りの時間が来ると、ミナレットの上に、ムアッズインと呼ばれる人が立ち、「アッラーは偉大だぞお〜」とか、「アッラーのほかには神はないよお〜、モハメッドはアッラーの使いなりい〜」とか、「お祈りに来いよお〜、お祈りは睡眠より大切だぞお〜」などと、肉声で呼び掛けをする。時には、「女どもよお〜、大事なところは隠しておけ〜い」などと、『コーラン』の一節を流すときもある。雨が降ろうが雪が降ろうが1日に5回も繰り返すわけだから、ムアッズインの仕事は大変な労働である。ムアッズインは、敬虔な信者で、しかも声も良くなければならないから、田舎の村ではそうそう交代する者がいない。今日は気分が乗らないからやめるとか、風邪をひいた

からといって休むわけにはいかないので、今では録音テープを流しているモスクが多くなってきた。

アラブ社会に住んでいる人たちは、毎朝薄暗い内から大音響で流れてくる「ファジルの祈り」と呼ばれる早朝のアザーンに眠りから覚まされる。「蛇足だが、異教徒の雲竹斎には、早朝のアザーンは非常に迷惑だったが、日本に帰国しても、毎朝家内の怒鳴る大音響で目が覚めることには変わらない」などと、たまには、こういった下らないことを言わなければ、友人たちは話に飽きて勝手なことをしはじめる。

しかし、たいがいは、その途中で、お寺の住職である友人が「オレの寺ではだれでも鐘楼にあがらせて鐘を撞けるぞ」と言いだす。すると、必ず「じゃあ、こんどオレに撞かせろ」という友人も出てくるが、「よし、ついでにお説教をしてやる」と言うものだから、「冗談じゃねえ、おまえのような生臭坊主の話なんか」などという展開になって、こうなると、もう私の話なんか聞かない。